2020年10月4日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書12章20〜26節

説教題：一粒の麦の命をもらって

私は大学2年の時に自分の手に負えない問題を抱えました。不安で、どうして良いか分からなかった時、心の中に1つの言葉が浮かび上がって来ました。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11:28)。小学生の時に通った日曜学校で覚えた御言葉だったのだと思います。「教会に行ったら何か変わるかも知れない」、そんな気持ちになって、木曜日の午後、教会に飛び込みました。教会には2〜3人の人がおられて、短い交わりをしました。何を話したかは覚えていませんが、玄関を出る時、外の景色の色が変わったような気がして、そこから私は7年ぶりに教会に戻ることが出来ました。今日の箇所でギリシヤ人がイエス様のところに来ますが、ここを読んで、自分がイエス様のところに行った時のことを思い出しました。皆さんも、色々な導きでイエス様のところに来られたことでしょう。

今日の箇所は、イエス様がエルサレムに入城された、その日か、あるいは翌日か、ギリシヤ人がイエス様のところに会いに来たことを伝える個所です。この個所は何を語るのでしょうか。2つのことを申し上げます。

1：ギリシヤ人の来訪の意味〜イエスの思いを引き継ぐ

20〜21節「さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、『先生。イエスにお目にかかりたいのですが』と言って頼んだ」(20〜21)。ユダヤ教は、その高い倫理性の故に、異邦人の中にもユダヤ教に惹かれる人がいました。彼らは、そのような人達だと思われます。「過越しの祭り」に参加するためにエルサレムに来ていたのです。ではなぜ、イエス様に会いたいと思ったのでしょうか。「宮きよめ」が理由だったかも知れません。エルサレムの神殿で異邦人が入ることが出来る一番外側の「異邦人の庭」は、両替商や犠牲の動物を売る商人達が軒を連ねて商売をしている場所でした。とても祈れる雰囲気ではない。イエス様は「神殿は祈りの家だ」と言って商人達を神殿から追い出されました。このギリシヤ人は、イエス様の行動に感銘を受けたのかも知れません。あるいは、人々は、イエス様がラザロをよみがえらせた話をしていました。彼らも「イエスは死に打ち勝たれた方だ」と聞いて、会ってみたいと思ったかも知れません。いずれにしても、神のことを知ることが出来るかも知れない、生る現実に光が当たるかも知れない、希望が生まれるかも知れない、そんな切実な思いでやって来たのではないでしょうか。ピリポとアンデレはギリシヤ人をイエス様のところに連れて行きました。

この出来事から何を学べるでしょうか。ギリシヤ人達は、やがては初代教会のメンバーになって行ったと思います。でも、彼らがイエス様のところに来るには、旧約の時代から、神を信じる人々が、神を畏れる生き方を通して、異邦人に神様を指し示したのです。また、初代教会の伝道も、ユダヤ教の会堂から始まります。長い神の民の歴史を土台として初代教会は成長して行った

のです。ここでピリポとアンデレが、ギリシヤ人をイエス様に引き合わせているのは、起こったことが書いてあるというだけではなくて、福音書記者ヨハネは、ピリポやアンデレが、後に異邦人にイエス様を紹介して行ったことを言いたかったのではないかと思います。イエス様の弟子達、そして初代教会の人々、それに続く多くの信仰者、その人々が、遥か私達にまで、信仰を守り、伝えたのです。私達は、自分 1 人で信仰を持って、神様との関係に入るように思うかも知れません。しかし、私達が神を信じて喜んで生きている、その背後には、多くの信仰者の歩みがあって、私達はその上に信仰生活をさせてもらっているのです。その時代、時代に生きた信仰者が、与えられた信仰を守り、伝えてきたのです。そして今は、私達が、信仰を次の人々にバトンタッチするために、この時代に置かれているのです。神は、この信仰を次の世代に伝えるために、私達に委ねられたのです。だから私達は、譲り受けたこの信仰を、信仰の生涯を、大切に生きたいと思うのです。そして願わくは、私達も、次の世代にバトンタッチできるように、誰かに神を信じて生きる恵みをお分かち出来るような、そんな信仰生活でありたいと願います。それが一粒の麦として死んで下さったイエス様の思いを引き継ぐことになるのではないでしょうか。

その意味で今日、N さんが洗礼を受けられることは、教会にとっても、大きな祝福です。

2：主イエスのメッセージ

イエスはギリシヤ人に会われたのか、ヨハネは語りません。それは、ここで語られるイエス様のメッセージが、ギリシヤ人に対してだけ語られたものではなく、この個所を読む全ての人に語られていることを、ヨハネが意識しているからだと思います。イエスは 2 つのことを語っておられます。

1）ご自分の十字架についてのメッセージ～十字架を受け取る

23 節「人の子が栄光を受けるその時が来ました…一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(23～24)。イエス様は、伝道の対象を主にユダヤ人に絞っておられましたが、ここに来て異邦人の中にイエス様の教えを求めて訪ねて来る人が起こされました。これは、イエス様の伝道が射程距離の最大域にまで届いた、これから弟子達が伝道して行くための土台造りが終わった、そのことを意味しました。それでこれまで「まだ私の時は来ていない」と言って来られたのに、「栄光を受ける時が来た」、つまり「十字架に架かる時が来た」と言われたのです。イエスは「十字架に架かる」ことを、「栄光を受ける」と表現され、そして「十字架が豊かな実を結ぶ」と言われました。どういうことでしょうか。

人々は、神からの救い主がやって来て、ユダヤ社会をローマから解放してくれることを救いだと思っていました。しかし彼らのより切実な問題は、むしろ生きて行く上での苦しみであり、悲しみであり、罪が導き出す重荷であり、その重荷に解決が見当たらないということだったのです。私達の問題もそうでしょう。でも、どこに解決があるのでしょうか。

ある牧師のところに 1 人の女性が訪ねて来ました。彼女は、声を振り絞るようにして「取り返しのつかないことをしてしまいました」と言いました。牧師は「取り返しのつかないこと」の内

容を聞き出そうとしました。しかし彼女は、それ以上、口を開かずに、教会から出て行ったそうです。牧師は思いました。「彼女は、何か大きな者に自分の悲しみや悩みを注ぎ出したかったのだ…なぜ、どんな絶望さえも受け止めて、それを恵みで包む方の前に 2 人で立って、共に祈ることが出来なかったのか」。私達にも、日毎の問題があります。私達の問題も、1 つ解決すれば、また次のことがやって来る。であれば、私達にとっても大切なことは、問題も何もかも含めて、私達の生きる現実を支えて、励まして、私達を持ち運んで下さる神との交わりに入り、自分の力だけではない、その方の命と力に生かされて生きることではないでしょうか。そして、必ずやって来る死に対する解決を持つことではないでしょうか。しかし、どうすれば良いのでしょうか。それは、イエス・キリストの十字架という橋を渡って神の懐に飛び込むことです。十字架は、ここまで悲惨な死があるのか、というようなものです。しかし、それがなければ、神との交わりの道は出来なかったのです。そしてそれは、独り子をも世に遣わされた神の愛と憐れみ、という神の栄光を余すところなく表すことになったのです。「一粒の麦が…もし死ねば、豊かな実を結びます」(24)。「神の子が代わりに死ぬなら、それを受け取った人々は、神との交わりに入り、神の命に生きるようになる、神の命で死に打ち勝つようになる」。自分に与えられた方法で神の栄光を表し尽くすという意味で、イエス様は十字架を自分の栄光だと言われたのです。その十字架が、命の実を豊かに生み出すのです。

このことは、何を訴えるのか。それは、私達のためにイエス様が地に落ちて死んで下さったということを、しっかり受け止めることの大切さです。イエスが死んで下った。だから私達は、神と交わりに入れられ、神の恵みを頂いて生きる者とされている。死んだ後に、なお希望を見ることが出来るのです。私達は、イエス様という一粒の麦の実りなのです。大切なのは、イエス様が自分のために死なれたということをしっかりと受け止めることです。私達はイエス様から「あなたのために、わたしは一粒の麦として地に落ちて死んだのだよ」と語られているのです。

2）信仰者の生き方についてのメッセージ～イエスの愛に生きる

25 節「自分の命を愛する者はそれを失うが、この世で自分の命を憎む者はそれを保って永遠の命に至る」(25)。「自分のいのちを愛する…自分のいのちを憎む」とは、どういうことでしょうか。

「自分のいのちを愛する」というのは「イエス様の愛を無視して、自分を喜ばせ、自分を満足させることを最大の目標にして生きる」、そういうことだと思います。自己中心の自分を愛する、結果として自己中心(罪)に振り回される、イエス様は「そういう生き方を憎め」と言っておられるのです。更に言うと「メッセージ訳聖書」は「自分の命を憎む」という言葉を「愛に置いて向う見ずになる」と訳しています。自分の力だけで生きようとしない、イエス様に愛をもらって、イエス様の愛に生きようとすること、それが、自分の命を憎むことであり、イエス様に仕えることだと、そう言っておられるのではないでしょうか。

渡辺和子というシスターが「自己中心(罪)と闘う」ために「小さい死」ということを勧めます。そしてイエス様に仕える生き方をこう言います。「『小さな死』とは、自分のわがままを抑えて、

他人の喜びとなる生き方をすること、面倒なことを面倒くさがらず笑顔で行うこと、仕返しや口答えを我慢することなど、自己中心的な自分との絶え間ない戦いにおいて実現できるものなのです。『一粒の麦が地に落ちて死ねば多くの実を結ぶ』ように、私達の『小さな死』は、いのちを生むのです」。彼女の言う「小さい死」が私達の回りに実(新しい状況)を結んで行くということでしょう。

しかし、そう言われても難しいと感じるかも知れません。だから、イエス様は、励ましと祝福を語って下さいました。「そのように生きることが永遠の命の繋がる生き方だ」と言われるのです。さらに「そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる」(新共同訳 26)と言われます。そういう生き方の中で、私達は、どんな時にもイエス様と一緒にいることになるのです。さらに言われました。「もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます」(26)。祝福の約束です。

私達のために一粒の麦として地に落ちて死んで下さったイエス様が「わたしについて、来なさい」と言われます。そこに永遠に至る祝福があると言われるのです。感謝と信頼を持ってイエス様に仕えて行きたいと願います。